明治学院詩集『ヒュペリオンの丘』で韓国『創造文芸』文学賞を授与されたことについて

中山弘正

『あんげろす』第50号(2009年12月)に「校門に立つ牧師」という小文を載せていただいた。そこに書いた「東北アジアキリスト者文学会議」の交流の中で、ほぼ 15 年位も前から、連れ合いの直子の詩はかなり多くハングルに訳されていた。

この会議の推進母体の一つになっている韓国の『創造文芸』社は、ここ5年にわたり5人の韓国文学者に『創造文芸・文学賞』を出してきたが、今年は直子への授賞を決めたからぜひソウルに来るようにとの電話がかかってきたのが2月1日であった。「他にも沢山適任の方があるのに」と直子は遠慮したが、「もう審査委員会で決定したから、ぜひ」とのことで、2月25日の授賞式に同行した。

ちょうど『創造文芸』社の創立 13 周年の記念式典が行なわれ、その中に授賞式も組み込まれていた。ざっと百数十名。沢山ののぼりや花束が演壇を飾っていた。審査委員の方々などが数名次々に選考の理由や感想を話されたが、「決して日本人だから、という理由ではない、詩の純心信仰的なこと、詩に深みがあることによる」といったお話しがほとんどで、中には白金チャペルの「御真影」を入れていた扉、「チャペルの壁穴」の詩にふれられた方もあったとのことである〔すでに 30 年近く、「民族和解」をも目指して「ソウル・日本人教会」を牧会して来られた吉田耕三先生ご夫妻があとで教えて下さったのである。お嬢様の由架子さんは、本校「国際学部」を卒業、現在日本の神学校で学んでおられる〕。

今年は日本が朝鮮を併合した「日韓条約 100年」の年。にもかかわらず敢えて日本人に賞を出された韓国の方々に私達は深い敬意を感ぜずにはいられなかった。「仇に恩を返す」ことは深く強い信仰がなければとてもできない。直子はそういったことを含めた謝辞の中で、とくに尹東柱(ユンドンジュ)にふれ、「私どもの長男が結婚したその歳で尹東柱は獄死された。花嫁のヴェールを揚げることもなく。私は尹東柱のお母様に本当にごめんなさい、と申し上げます。」と述べた。式典が終了してから、詩を沢山訳して下さってきた李相宝(イソンボ)先生が「何人もの人があそこで泣いてしまった。私も涙が出てしまった」といわれた。

キリスト教研究所には「安重根(アンジュングン)」の書が掲げられている。彼は、1909年10月26日にハルピン駅で伊藤博文を射殺した人物であるが、翌1910年3月26日に刑死した。「日韓条約」が調印されたのは、この年の8月である。カトリックの信徒であった。

ソウル市内は、「3・1万歳独立」運動(1919年)の記念日の直前で、到るところに韓国国旗がひるがえっていた。

(なかやま・ひろまさ 名誉所員・本学名誉教授)